

家族間の呼称表現における通時的研究 子供中心的用法に着目して

金 世 朗

要 旨

本稿에서는 가족성원간의 호칭표현 중, 일본특유의 언어습관이라고 여겨지는 친족호칭의 「아이중심(최연소자중심)적」 용법에 주목하여 그 사용원리를 규명하고자 한다.

일본의 가족성원간 호칭표현의 사용원리가 무엇인가를 밝히려는 연구는 지금까지 수없이 연구되어 왔는데, 「아이」가 그 기준이라는 생각과, 아이는 전혀 호칭에 관여하지 않고 집안내의 「위치/지위」가 그 기준이라는 두 종류의 생각으로 의견이 나뉘어진다.

특히, 후자를 주장하는 것은 방언학자들인데 그들은 「아이」를 중심으로 한 용법은 현대 표준어의 영향으로 생긴 것이라고 주장하고 있다. 본고에서는 그 생각에 반하여 아이를 중심으로 한 언어습관은 현대에 생긴 것이 아니라, 이전부터 일본내에 존재하던 언어습관임을 증명하고, 나아가서는 그를 통해 가족성원간 호칭표현의 실체를 밝히고자 한다.

キーワード……子供中心 家中心 地位・序列呼称 家族呼称の「間接的用法」
一律的呼び合い方

はじめに

本稿では、家族成員間の呼びかけ表現の使用のうち、日本の特色的な言語習慣と思われる親族呼称の「子供中心的用法」に着目し歴史的に見ていき、日本における家族呼称の使用原理を明らかにしたい。

日本では家族間で呼びかける時、例えば妻が夫に対して「お父さん・パパ(Father・Daddy)」、父親が自分の息子に対して「お兄さん(Elder brother)」と呼ぶような言語習慣を持つ。近隣国である韓国とは、家族呼称の使用面ではかなり似ているとはいえ¹⁾、上のように親族呼称を以って同等あるいは下位の者に用いるといった用法は著しく異なる点である²⁾。

日本の家族間の呼称表現には、血縁関係通りの呼び方をする「直接的用法」と、そうではないもので何らかの要素が作用していると見られる「間接的用法」の二つの用法が存在するが、

後者の「間接的用法」が上のような特色的な親族呼称の使用の原因になっていると判断される。

金(2001)では、そのような日本の家族間の呼称表現に着目し研究を進める中で、家の「最下位の成員」が呼称を決める重要な要因であることがわかった。しかし、実は日本におけるこのような親族呼称の基準がどこにあるのかに関する問題は、ずっと前から多くの学者によって研究されており、大きく二つの論に分かれている(上杉 1991 : 69)。

その一つは「子供」というのが家族間の呼称を決める要素であるという考え方で、もう一つは「子供」という一個人ではなく日本の社会システムの一つであった家督相続による家の中での「地位」がそれであるという考え方である。

前者の考え方を支持する鈴木(1968 : 171)は、日本の親族用語は多くの場合、自己中心語の他者中心的用法として使われるとし、次のような法則を提示した。

日本の家族内で、目上の者が目下の者に直接話しかける時は、家族の最年少者の立場から、その相手を見た親族名称を使って呼びかけることができる。

その他、「子供」が日本の家族間の呼称生活に影響を与えると見る学者は渡辺友左(1978)³⁾が挙げられ、外国の学者の間でも Embree(1939)⁴⁾、Cornell(1956)⁵⁾が代表的である。

一方、家族呼称の基準が子供ではなく、家庭内の「地位・序列」であると主張している代表的な学者は Kitaoji(1971)⁶⁾・馬瀬(1978)⁷⁾・上杉(1991)などが挙げられる。

興味深いことは、この見解を持つ学者らの共通する意見は、以前は「子供」は呼称表現には全く関係なく家の中での「地位・序列」がそれを決める基準であったことと、それが共通語の影響でだんだん「子供中心的」に移行していると主張しているところである⁸⁾。

しかし、果たして「子供」というものは家族間の呼称表現に全く関係しなかったのであろうか。「子供中心的用法」が共通語の影響で生じたものというのなら、その共通語というのはどこから生じたものなのか、近代化による西洋文化の影響なのかあるいはいきなり生じた現象なのかといった疑問が生じてくるのである。

従って、本稿では親族用語の使用に着目し通時的な視点から、「子供中心的」な使用がより古くから存在した言語習慣の一つであったかどうかということを明らかにしたいのである。

さらに、それを通じて最終的には日本の家族用語の使用原理が何であるかをめぐった問題を再検討し、その真相を明らかにすることを目的とする。

研究方法及び資料

親族用語の使用には、「誰々、ご飯だよ。」といった呼びかけ表現(Address Term)と「これは私の誰々だ。」といった言及表現(Reference Term)の2種類がある。本稿では、家族同士で呼び合う時、子供がどれだけ影響しているのかを見るため呼びかけ表現のみを対象とする。よって、資料も子供のいる家族を対象とすることを基本とする。

まず、「子供」を基準とした呼称生活が従来から存在したことを証明する為には、通時的方法を取る必要があるが、本稿では現代・近代・近世の三つの時代を中心に見ていくことにする。

資料は現代・近代の場合は問題になっている「地位・序列」による呼称が盛んに発達していた新潟地域⁹⁾を中心に見ていくが、現代のものは筆者が直接調査したものを、近代のものは上杉(1991)の資料を用いることにする。

近世における資料は、直接調査が不可能である為、江戸時代の文学作品のうち庶民の生活を描いたもので会話文が多く呼びかけ表現が豊富に出ている滑稽本・歌舞伎の作品を用いることにする。また、その当時の日本全国の方言や風俗をまとめた辞書類も参考することにする。

1 現代(筆者調査)

・対象地域及び対象家族

新潟県新潟市五十嵐二の町：日本海の海岸線に接する漁業・農業地域

現在当地に居住中の3世代同居家族4世帯。原則的に外住歴のない家族を対象とする。

・調査日

1999年6月

・調査方法

家族構成員本人に、「～に対してどういうふうに呼んでいますか」といった質問をし、直接答えてもらう方法を取った。

2 近代(上杉1991)

・対象地域および対象家族

新潟県入広瀬村大字横根：新潟県の中央東端・北魚沼郡の東北端に位置する水田農村地域

対象家族：上層に格付けされてきた延安氏家。前世帯主延安氏の祖父に当たる荘四朗氏は、明治期に村長を務めた。

・調査日

1986年2月

・調査方法

上杉(1991)では、調査方法に関して明確に述べていないが、延安氏(昭和44年生まれ)を通じて得たものと見える。資料は「昭和初期」「昭和15年頃」「昭和30年頃」「昭和50年頃」「昭和61年」の五つの時代に分けて調査されているが、本稿ではそのうち「昭和初期：延安氏が子供の頃」「昭和30年頃：延安氏の家督相続後」「昭和61年：調査時点」の三つの時代を用いる。さらに、言及表現と呼びかけ表現に分けられているが、呼びかけ表現の資料のみを用いることにする。

3 近世

- 『東海道四谷怪談』(新潮日本古典集成 新潮社版 1981)
- 『大経師昔暦』(近松全集 第10巻 朝日新聞 1928)
- 『女殺油地獄』(近松全集 第12巻 朝日新聞 1928)
- 『浮世風呂』(日本古典文学大系 63 岩波書店刊行 1957)
- 『片言付補遺 物類称呼 浪花聞書 丹波通辞』(日本古典全集刊行會壽梓 1985)
- 『増補 俚言集覧 上・下』(近藤出版社 1899)
- 『類聚 近世風俗志』(文潮社書院 1929)

一 各時代における家族呼称の特徴

現代

表1 現代における家族成員間の呼称表現
(新潟五十嵐二の町:金(1999))

A家「古俣正好」家							B家「古俣雅夫」家						
を	祖父(63)	祖母(59)	父(婿30)	母(娘26)	長男(7)	長女(4)	を	祖父(66)	祖母(62)	父(39)	母(34)	長女(10)	次女(3)
が	正好	晴美	三夫	和美	幸輝	悠奈	が	雅夫	秀子	雅章	和枝	あやか	あすか
祖父	正好	オイ ハニちゃん ハニ	オイ ミツオ	オイ カシミ	コーキ コーキクン	ユー ユーナちゃん	祖父	雅夫	オイ ハニちゃん オハニちゃん	ハハ マサアキ	ヌ カスエサン	アヤカ アヤカちゃん	アスカちゃん
祖母	晴美	ジツちゃん	ハハ ミツオ オイ	ヌ カシミ	コーキ	ユーナちゃん	祖母	秀子	ネ オトサン オジニちゃん	ハハ マサアキ	カスエサン	アヤカ	アスカ
父	三夫	オジニちゃん オカーサン	ハニちゃん オカーサン	ヌ カシミ カ	コーキ	ユーナちゃん	父	雅章	ジニちゃん	ハニちゃん	カスエ	アヤカ	アスカ
母	和美	ジニ ジツちゃん オトサン	ハニ ハニちゃん オカーサン	ハハ	コーキ	ユーナちゃん	母	和枝	オトサン オジニちゃん	オカーサン オハニちゃん	ハハ	アヤカ	アスカ
長男	幸輝	オジニちゃん	オハニちゃん	ハハ オトサン	ママ オカーサン	ユーナちゃん	長男	アヤカ	オジニちゃん	オハニちゃん	オトサン ハハ	オカーサン	アスカ
長女	悠奈	オジニちゃん	オハニちゃん	ハハ ママ	コーキ		長女	アスカ	オジニちゃん	オハニちゃん	ハハ ママ	オネーサン	

C家「伊藤恵司」家							D家「若杉雅彦」家						
を	祖母(69)	父(37)	母(35)	長男(10)	長女(7)	次男(6)	を	父(40)	母(38)	長男(9)	次男(6)	三男(1)	
が	信子	恵司	美佐子	真平	美来	状	が	雅彦	智恵	佳隆	雅人	優磨	
祖母	信子	オトサン ケージ	オカーサン ミサコサン	シンペー シン	ミク ミクちゃん	ジョー ジョークン	父	雅彦	トモ オカーサン	オニニちゃん ヨシタカ	オニニちゃん マークン マサト	ユーマ	
父	恵司	ハニちゃん ハハ	オカーサン ミサコ ミサコサン	シン	ミク	ジョー	母	智恵	オトサン	オニニちゃん ヨシちゃん マサト	マークン マサト	ユーマ	
母	美佐子	オカーサン オトサン	ネ オトサン	シンペー シン	ミク	ジョークン ジョー	長男	佳隆	オトサン	オカーサン	マサト	ユーマ	
長男	真平	ハニちゃん	オトサン	オカーサン	ミク	ジョー	次男	雅人	オトサン	オカーサン	オニニちゃん ヨシタカ	ユーマ	
長女	美来	ハニちゃん	オトサン	オカーサン	オニニちゃん	ジョー	三男	優磨					
次男	状	ハニちゃん	オトサン	オカーサン	オニニちゃん	ミク							

注:「間接的用法」には下線で記した。

祖母(妻) 祖父(夫)	<u>ジッチャン</u> 、ペン モッテナイー、カシテ。(A家)
祖母(親) 父(息子)/母(嫁)	<u>パパ(ママ)</u> 、ユーハン デキタ ヨー。(B家)
父(夫) 母(妻)	<u>オカーサン</u> 、ニチヨービニ ドコカ イゴー レ。(C家)
父・母(親) 長男(上の息子)	<u>オニーサン</u> 、ゴハンダ ヨー。(D家)

注 以下、例文中の下線は筆者によるものである。

表1のA家の古侯正好家を見ると、孫である長男・長女は祖父に対して「おじいちゃん」と呼んでいるが、これは親族呼称の「直接的用法」に当たる。しかし、娘である母と婿である父も祖父つまり自分の父親に対して「じい」「おじいちゃん」と呼んでいる。祖母も自分の夫である祖父に対して「じっちゃん」と呼んでいることが表からわかる。つまり、大人の間ではその血縁関係通りの呼称よりは、子供が用いる呼称に合わせて一緒のものを用いていることがわかる。一応、表中にはそのような性格のものには下線を引いてあるが、それらは親族呼称の「間接的用法」に入る。A家ではそのような二つの用法が存在するため、A家の祖父(古侯正好)は家族全員に「おじいさん」という意味ないし言葉で呼ばれるといった「一律的呼び合い方」¹⁰⁾が成されている。表で見る通り、そのような現象はA家のみではなく、B家・C家・D家でも見られる。

では、なぜそのようなことが起こるのであるのか。

B家の祖母古侯秀子さんは、自分の家にはじめて孫が生まれた日、いきなり夫から「おばあちゃん」と呼ばれショックを受けたことがあると教示してくれた。それは「間接的用法」の出発が「子供」であって、家の中の「子供」という存在が家族間の呼称表現に大きな影響を与えていることを意味する¹¹⁾。

しかも、「子供」といってもその中心となる「子供」は、一番下の子つまり、最下位の成員であるようである。B家を見ると、大人同士で用いる呼称が上の子供ではなく下の子供が用いるものと一致していることがわかる。またD家でも、長男と次男は親から「おにいちゃん」と呼ばれている。「おにいちゃん」というのは親のお兄ちゃんではなく、一番下の子である三男ゆうまのお兄ちゃんであるのに、それを親たちはその末子との関係を表す言葉で上の子達を呼んでいるのである。

いずれにしても、目上から目下にのみならず目下から目上に対してもこのような用法が使用できるといった考えには、やや差があるとはいえ、鈴木の言う通り、現代における家族間呼称表現は「子供」に大きな影響を受けており、特に最下位の者がその原点になっていることは明確な事実である。

注目すべきことは、それらは子供がその場にいなくても大人同士でも用いることがあることから、元は子供から始まったものであっても、使ううちに固定化しその家の中でのニックネームのように使用されるという点である。

近代

この時期は直接調べられる最も近い過去でありながらも、最も社会的変化の多かった重要な時期でもあることをまえて触れておきたい。

表2 近代における家族成員間の呼称表現
(新潟横根:上杉(1991))

昭和初期の家族呼称(1930年代)

を が	祖母 リト	父 勝造	母 ミチ	長女 チヨ	長男 信資	次男 延安	三男 昭三	次女 セツ
祖母 リト		トト	ミチ	チヨ	アソニヤ	ノ	ショ	セツ
父 勝造	バンバ		カ	チヨ	アソニヤ	ノ	ショ	セツ
母 ミチ	バンバ	トト		チヨ	アソニヤ	ノ	ショ	セツ
長女 チヨ	バンバ	トト	チヤチヤ		アソニヤ	ノ	ショ	セツ
長男 信資	バンバ	トト	チヤチヤ	チヨ		ノ	ショ	セツ
次男 延安	バンバ	トト	チヤチヤ	チヨ	アソニヤ		ショ	セツ
三男 昭三	バンバ	トト	チヤチヤ	チヨ	アソニヤ	ノ		セツ
次女 セツ	バンバ	トト	チヤチヤ	チヨ	アソニヤ	ノ	ショ	

昭和30年頃の家族呼称(1956年頃)

を が	祖母 ミチ	父 延安	母 フミ	長女 キク	次女 スミ	三女 ヒサ	長男 保夫
祖母 ミチ		トト	ミチ	キク	スミ	ヒコ	ヤソ
父 延安	バンバ		カ	キク	スミ	ヒコ	ヤソ
母 フミ	バンバ	トト		キク	スミ	ヒコ	ヤソ
長女 キク	バンバ	トト	チヤチヤ		スミ	ヒコ	ヤソ
次女 スミ	バンバ	トト	チヤチヤ	キク		ヒコ	ヤソ
三女 ヒサ	バンバ	トト	チヤチヤ	キク	スミ		ヤソ
長男 保夫	バンバ	トト	チヤチヤ	キク	スミ	ヒコ	

昭和61年時の家族呼称(1987年)

を が	祖父 延安	祖母 フミ	叔母 キク	父 保夫	母 君子	長男 祐輔	長女 志保
祖父 延安		フミ	キク	ヤソ	カザ	ユスケ	シホ
祖母 フミ	ジヤン		キク	トヤ	カザ	ユスケ	シホ
叔母 キク	ジヤン	バンバ		ヤソ	カザ	ユスケ	シホ
父 保夫	ジヤン	バンバ	キク		カザ	ユスケ	シホ
母 君子	トヤ	バンバ	キク	トヤ		ユスケ	シホ
長男 祐輔	カザ	バンバ	キク	トヤ	カザ		シホ
長女 志保	カザ	バンバ	キク	トヤ	カザ	ヒコ	

注：「間接的用法」は下線で記した。

まず、昭和初期の様子をまとめた表 2- を見ると、各家族成員はすべての家族成員から同じ呼称でそれぞれ呼ばれていることが目につく。祖母(リト)は息子(勝造)からも嫁(ミチ)からも孫からも「バンバ」と呼ばれており、父の「勝造」もすべての成員から「トト」と呼ばれている。つまり、「一律的呼び合い方」が成されているということであるが、それは親族呼称の「直接的用法」と「間接的用法」が共に存在していることを意味する。

ここまでは、現代とあまり変わらない様子を見せているといえる。しかし、それらすべての「間接的用法」が現代と同じく「子供」によるものであると判断してよいのであろうか。以下を見てみよう。

「間接的用法」と見られる使用の中にはやや変わった使用を見せる語彙がある。父(夫)から母(妻)に対して用いられている「カカ」と長男「信資」に用いられている「アソニヤ」がそれ

である。

母ミチは自分の子供から「チャチャ」と呼ばれ、姑の祖母からも「チャチャ」と呼ばれている。しかし、夫である父は特別に「カカ」と使い分けている。地域によっては「お母さん(mother)」という意味にもなるこの「カカ」は、世代が変わった表2 - 1でも父(夫)が母(妻)に対して使用していることから夫が妻に対して用いる一種の「身分呼称」あるいは上杉の言う「地位呼称」に相当するものではないかと考えられる。

また、一見、普通の親族呼称に見える「アンニヤ」もそのようなものと考えられる。表2のを見ると、「アンニヤ」は「カカ」とは違って、限られた人によるものではなく家族全成員によって、用いられている。特に、表で見る通り兄弟間¹²⁾では全く親族呼称が用いられず、お互いに名前呼称を用いている。それが、なぜか年齢では2番目の長男にだけは名前ではなく「アンニヤ」という言葉で呼びかけているのである。

『日本国語大事典(第二版)』によると、「アンニヤ」には「長男・跡継ぎ」の意があると記してある。つまり、「アンニヤ」は単なる親族関係を表す呼称ではなく、家の中での「地位・序列」を表す呼称まさに「地位・序列呼称」なのである。

さらにそれに関しては野口(1972:6)の以下のような具体的な報告がある。

子供が大きくなって口が利けるようになると父親を「ツアツア」あるいは「トト」と呼び、母親を「カカ」と呼ぶ。さらに、家督を譲ったのは、「ジジ・パパ」、譲られたものは「ツアツア」「カカ」、譲られる予定のものは「アンニヤ・アネ」と呼ぶとあり、「アンニヤ」が後継者を意味する言葉であることを明記している。ちなみに、子供からは「トト」と呼ばれても家督を譲ってもらう前だと親からは「アンニヤ」と呼ばれるとまで記してあるが、これらはすべて家督制度によって家族呼称が決まるということを説明している見える。

そうすると、表2 - 1の「バンバ・トト」も子供と大人が一緒に用いるからといって現代と同じく子供を原点とした「間接的用法」であると言いきることはできなくなる。ところが、だからといってそのすべての使用が「地位」を表すものであるとも言えない。

なぜなら、2 - 1で見た通り、母に対する呼称として祖母は身分を表す「カカ」を用いず、孫たちが用いる「チャチャ」を用いており、これはまさに現代で見られる子供中心な用法と一致するためである。

そうすると、「一律的叫び合い方」を見せる「バンバ」「トト」は「子供」に原点を置いている可能性も家督制度による「地位・序列」を示す可能性もあるということになる。

なぜこのような混同が起こるのであろうか。

それは、「アンニヤ」以外の語彙が持つ意味役割の二重性が原因といえよう。よって、ここではそのような使用を一言で判断することは難しいのであろう。ただ、ここではっきりといえることは、近代には現代とは違って新しく「地位・序列」というのが家族間の呼称に大きい影響を与えていたこと、また、わずかではあるが、現代と同じく子供を中心とした用法も確かに

存在していたことの両方とも認めることができるということであろう。

表2によると、戦後の表2- では代表的な「地位・序列呼称」である「アンニャ」ももはや使われなくなり、1980年代の表2- では「カカ」も使われなくなってほとんど現代の表1(金1999)と変わらなくなっていることは注目される。

近世(江戸時代)

ここでは、江戸時代の家族間の呼称表現について見ていくことにする。

現代と近代のように一つの表で家族間の呼称表現の使用を見るため、家族間の談話が割合多く出てくる『東海道四谷怪談』をもとに、表3にまとめた。

表3 東海道四谷怪談に見られる家族呼称

を が	祖父 孫兵衛	祖母 お熊	父 小平	母 お花	長男 次郎吉
祖父		ばばア殿 ばばめ ばば	小平	お花や 嫁よ 嫁女	次郎や 坊や 坊主
祖母	親父殿 ぢぢい殿		小平	お花	うぬ餓鬼め コレ次郎吉 コレ小僧や
父					
母	ぢぢ様 ととさん 舅御様 孫兵衛様	ばばさん ばば様 かか様	ととさん 小平殿		次郎吉
長男	ぢぢ様	ばば様	とと様 とと様		

注：「間接的用法」は下線で記した。

表3を見ると、現代で見られたように目上の者が目下の者に用いる「間接的用法」は見られないものの、「一律的呼び合い方」は確かに存在しており、よって呼称表現の使用に親族関係をそのまま表す「直接的用法」とそうではない「間接的用法」が存在していることがわかる。

1 直接的用法

次郎(孫) 孫兵(祖父) ぢぢ様、今日は蛭が売れぬゆゑ、晩にば様^にまた叩かれるわいな。

(東海道四谷怪談・後日序幕)

次郎吉(孫) お熊(祖母) どこへも隠しはしませぬ。ば様堪忍ぢや。(同)

お花(嫁) 孫兵(舅) 舅御様、モシ孫兵衛様、コリヤマアどうしようぞいな。(同)

伊石(息子) 源四(父親) ヤ、まことにおまへは親父様、どうしてこれへ。(同・後日中幕)

孫の次郎吉が祖父孫兵に対しては「ぢぢ様」を、祖母のお熊に対しては「ばば様」を、嫁のお花が舅の孫兵に「舅御様」というふうに相手との血縁関係通りの呼称表現を用いている。

2 間接的用法

孫兵(夫) お熊(妻) コレサばゞア殿、かはいさうに子供をそのやうに叱らぬものぢや。
(東海道四谷怪談・後日序幕)

孫兵(夫) お熊(妻) ばゞ、なにをそのやうにけたゞましく呼ぶぞいやい。(同)

お熊(妻) 孫兵(夫) コレ小僧や、ぢゞい殿、餓鬼を早く連れてござらつしやいな。(同)

お熊(妻) 孫兵(夫) コレ親父殿、なにも商売ぢやもの、売溜めの言はいでわいの。(同)

一方、直接的な血縁関係を表さない親族呼称の使用も見られたが、上の4例は夫婦同士の会話である。夫孫兵衛は妻お熊に対し「ばゞ」「ばゞア殿」、妻お熊は夫孫兵に対して「ぢゞ殿」「親父殿」と呼んでいるが、それは本人同士の関係を表すものではなく目下のものは「様」を夫婦同士では「殿」を用いる違いがあるのみで、子供が用いる言葉と同じものを用いているのである。

お熊(姑) お花(嫁) わしや玉子食うても、ぢゞい殿はあのやうなり、当てがござらぬ、いけ馬鹿馬鹿しい。夫に関して
(東海道四谷怪談・後日序幕)

お花(嫁) お熊(姑) さやうなら、ぢゞ様にあげませうわいな。舅に関して(同)

さらに上は言及表現ではあるが、その使用は注目される。姑が嫁と話しながら自分の夫のことを「ぢゞい殿」と呼び、嫁も姑に対し義理のお父さんのことを「ぢゞ様」と呼んでいる。

では、それらはどのような原理によって使用されるのであろうか。それらは以下のような原理のもとに使用されていることが考えられる。

2-1 「年齢」

おさんの父(夫) 母(妻) おばゞ、あれがてんのいかぬ何者やらと、うとき老眼すがして見る。
(大経師昔暦・中之巻・二十)

おさんの母(妻) 父(夫) 母は驚き、なふぢい様、情なやここにはりつげ。(同・二十三)

おさんの父(夫) 母(妻) 悲しいやおばゞ。(同)

上は近松門左衛門作の『大経師昔暦』に見られる例である。第1例は、夫道順が、夫に追われ逃亡中の娘おさんと遭遇し妻に話す場面で、第2例と第3例は壁に物干しと娘の影が重なっているのを見て娘が礎にされたと思ひこみ、夫婦が悲しんでいる場面である。

三つの例でわかることは、夫婦同士で呼び合うのに夫婦の間柄を表す呼称ではなく「おばゞ」「ぢい様」を用いていることである。「ばば」「ぢぢ」は先に見た通り、孫が祖父・祖母に対して呼びかけるのに使った言葉である。では、ここで使われている言葉が現代と同じく「子供」に原点を置いた「間接的用法」と言えるのであろうか。ここで注目すべきことは本作品の『大経師昔暦』の中の道順夫婦の娘おさんは、結婚はしているものの子供はまだいないという点である。つまりこの夫婦には孫がいないということになる。では、なぜこのような使用を見せるのであろうか。

「うとき老眼」からわかるとおり、道順夫婦は年老いた老夫婦である。

江戸時代の方言や風俗をまとめた辞書である『俚言集覧』の中には「ばゞ」に関して次のようなことが記されている。

ばゞ 二濁 老婆也祖母也〔皇朝類苑〕温成皇后乳母買氏宮中謂之買婆ゞ～ 以下省略
(俚言集覧・下・波集)

「ばば」は祖母のことも意味するが、年寄りの女性をも意味する。すると、『大経師昔暦』に見られる上の3例は、家の中の子供によるものではなく年老いた夫婦がお互いの年齢を考え、呼び合っているということになる。つまり、この際の呼称表現の使用原理は家族成員の「年齢」であるといえる。

2-2「地位・序列」

上で、家族間の呼称表現を決めるのに「年齢」というのが影響を与えていたことがわかった。

一方、江戸時代にも近代で見られたような家の中での「地位」や「序列」によって家族間の呼称が影響された例が見られる。

まず、「カカ」という言葉の使用に注目したい。下は近松門左衛門作の『女殺油地獄』で見られた例である。

おきよ(娘) お吉(母親) お清は六つ中娘、かゞ様、ぶゞがのみたいも。(女殺油地獄・上之巻・二)

おかち(娘) おさは(母親) ア、づゞない、^{かかさま}母様々々、母親はまだ帰らずかと、おかちが苦しむ
屏風のうち、門にはものまう。(同・中之巻・八)

お吉(母親) おきよ(娘) おきよゞ、とゞさまが見へたら、かゞにしらしややと。(同・上之巻・五)

第1例と第2例の「カカ」は子供が母親に対する呼称表現として用いており、第3例の「カカ」は母親が子供に対して自称表現として用いている例である。いずれも「母親」を意味しており、これは親族呼称の「直接的用法」に入る。

一方、そのような役割を持つ「カカ」は他の意味として使用される例が以下で見られる。

『東海道四谷怪談』で見られた例である。

与茂 や、そちは女房

お袖 おまへは与茂七さん 中略

お色 たんとおたのしみなされませ

トお色、奥へはいる。与茂七。徳利と茶碗をとり

与茂 サアかゝア、一ツ吞まつし

お袖 ほんにいつの間にそのやうなもの言ひに

与茂 ハテ、手めへはやつぱり古風な事を言つてゐるな 以下省略 (東海道四谷怪談・初日序幕)

与茂とお袖とは夫婦である。二人は地獄宿で何も知らず客の町人と遊女という間柄で会うが、話す途中で夫婦であることがわかり、与茂はお袖を妻として「カカ」と呼びかけている場面である。

直助 袖 お袖さん、おまへ昨日から見世へ出るさうだの。(東海道四谷怪談・初日序幕)

直助(夫) 袖(妻) サ、かゝア、寝ないか。(同・後日序幕)

さらに、上の2例を見ると「カカ」の特徴がより明確にわかる。

お袖は塩冶家中四谷左門の妹娘で、直助は左門と同じ格式の侍奥田将監の下部であったが、ずっとお袖に恋慕していた直助は、夫与茂が殺されたと思ひ込んでいるお袖に対し仇討ちをえさにして、表向きの夫婦になることを誘う。

第1例は夫婦になる前の場面で、第2例は三角屋敷で夫婦として生活している場面であるが、直助がお袖に対する呼びかけ語が「お袖さん」から「かゝア」に変わっていることが注目される。直助がお袖を妻として待遇していることがわかる。

以上、上の2例での「かか」は、夫が妻に対する呼びかけ表現として使用されることがわかった。ところが、作品『東海道四谷怪談』に登場する与茂と袖、当然ながら直助と袖の間には子供がまだいない。すると、ここで使用されている「かゝア」には子供の「母親」という意味はないということになる。つまり、「かゝア」というのは妻という身分や地位を表す言葉として使用されていることがわかる。

一方、この時代にも家督制による「序列」が呼称表現に影響を与えていたことがわかる。江戸中期に日本全国の方言や語彙を載せた辞書『物類称呼』によると、「アンニヤ」について次のように説明している。

兄 あに(嫡子也、俗に摠領といふ) 越後にてあんにやさといふ。東國にてせなといふ。出羽にてあんこうといふ。奥ノ南部にてあいなといふ。九筋にてばぼうといふ。土佐にておやがたちといふ(備前にていふ親かたもをなし心か) 以下省略 (物類称呼・巻一)

「兄」は「嫡子」また「跡継ぎ」を意味するとある。興味深いことは、「越後にてあんにやさ」とあるが、まさにそれは近代の表 2 で見られた「あんにゃ」のことであり、よって「地位・序列呼称」というのがこの時代も存在していたことが言える。しかも、その地域的分布を見ると、跡継ぎ制度つまり家督制がほぼ日本全域にわたって存在していたこともわかる。

2-3 「子供（最年少者）」

2-1 と 2-2 で、「あんにゃ」のような「序列呼称」は別として子供が用いる全く同じ形のものが「年齢」や「地位・序列」を原点として使用されている例を見てきた。

ここでは、わずかであるが明らかに現代で見られたものと同じ「子供」を中心とした例を紹介したい。

- 父親 息子 おぶうはどこだ。兄さんや、ころびなさんなよ。能く下を見ておあるきよ。
(浮世風呂・前編巻之上)
- 父親 息子・娘 これこれ兄さん、すべりなさんな。鶴さんはお持遊を落とすまいぞ。(同)
- 父親 息子 兄さん、早く這入な、兄「おとつさ^ろん、まだ熱いものを。(同)
- 父親 息子 ア、能ぞ。兄さん、能沈で温んな兄「アイ、よく沈むと金魚や緋鯉が出るのう金「ヲ、出るとも」(同)

上は『浮世風呂』という作品で見られた例である。3 歳の女の子、6 歳の男の子、それから 40 余の父親が銭湯に入る場面である。注目されるのは上の子の 6 歳の男の子に対する呼び方である。父親から「鶴」か「鶴さん」と名前では呼ばれる妹とは違って、上の子はひたすら「兄さん」と呼ばれており、結局この作品では名前が一回も出てこないまま終わってしまう。

「お兄さん」というのは無論、お父さんにとっての兄ではなく、あくまでも最年少の鶴にとっての兄なのである。ここで、「兄さん」というのはまるで上の子の名前のようにになっている。

現代で見られた親族呼称の「間接的用法」と同じもので、これは大人が最年少の子供の立場に立ってそれに合わせて、上の子を呼んでいるのに違いない。また、その証拠として大人の言葉のほとんどが子供に合わせた幼児語を多用していることからわかる。

この他にも、江戸時代の資料では、子供が家族間の呼称に影響を与えたという記録が残っている。

江戸男女児の其父を称して中以上は御爺様おとつさん母を御嫁様おつかさん江戸専らつと詰音す小民の子は父を「ちやん」おつちやんの上略也幼して舌の利ならざる故如此を今は漸利舌の児も傲之云故に或は妻も夫を呼でちやんと云ともに卑賤の辞也。母を「おつかあ」と云御かかの略也。児すでに成長して父に別称なく母を御袋と云おふくると訓ず 祖父祖母京阪にてはぢぢばばと云江俗はぢぢいばばあと云己れが妻を京阪にてかかと云江戸にてかかあと云。(近世風俗志・第三編)

かか：母の事 ~中略~〔通雅一九稱謂〕北朝稱天子曰家家北齊呼嫡母亦曰家家妻をカ、と云兒に据て言なり西土に母を媽々と云郷談に妻を媽々と云同し又卑賤の者の妻をカ、と云口鼻の字を訓り又カ、とは耀也赤々の義也又笑聲也~ 以下省略 (俚言集覽・上・加集)

上で見るように、江戸時代の各地域の風俗や習慣及び方言をまとめた『近世風俗志』と『俚言集覽』によると大人が子供と同じものを用い、しかもそれは子供の立場に立って用いていた事が明らかに記録されているのである。

それを考慮すると、近世時代には「年齢」や家の中での「身分・地位・序列」によって、家族間の呼称が大きく左右されていたものの、それと共に子供(最年少者)というのも呼称生活に大きく影響を与えていたことには違いないことがわかる。

二 家内呼称表現の変化

家族間呼称表現の使用における時代別特徴をまとめると、以下のようになる。

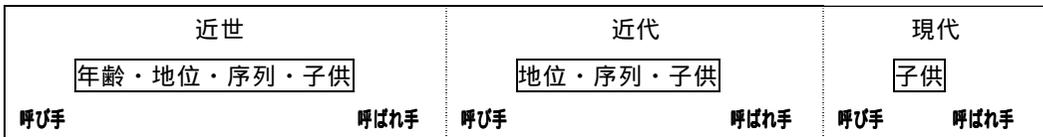
現代では、「子供」というのが家内での呼称を決める重要な要素である。子供が生まれると、大人は常に最年少の子供の立場から見た関係による呼称表現を相手に用いる。

近代では、「子供」によるものはわずかで、その家族成員の家の中での「地位」や家督制に基づく「序列」を中心とした呼称が活発に使用されている。

近世でも、近代と同様に「子供」によるものはわずかで、家の中での「地位」や「序列」が家族間の呼称表現に大きな影響を与えている。ところが、相手の「年齢」というのが新しく重要な要素として働いていた。

それをその決定要素を中心に時代順に並べたものが図1である。

図1 家族呼称を決める要素の時代別変化



図の中の「 」は呼び手から呼ばれ手へ方向を示し、 の中は呼ばれ手への呼称を決める「決定要素」を記したのである。

それによると、近代・近世・現代に至るまで見られる変化のうち最も注目すべきところは、「決定要素のシンプル化」である。特に、近代から現代の間にすこぶる変化を見せていることから、近代という時代が家族間の呼称において大変な転換期であったことがわかる。

そのシンプル化現象と現代で見られる「子供中心的用法」、つまり「最年少中心的用法」が密接に関わっているのではないかと判断される。現代・近代・近世の各時代の特徴を見ると、従来は「子供」よりも「年齢」とか「地位・序列」といった多様な要素が家族間の呼称表現に大きく影響を与えていたことは確かである。しかし、図1を見てわかるように、いつの時代においても「子供」というのが家族呼称を決める要素として働いていたことも事実である。

つまり、従来の日本には「子供」を含む上のすべての要素が共に存在していたことが言えよう。

従来	「年齢」「地位」「序列」 > 「子供」
現在	< 「子供」

注 : 「無」に近いことを表す。

それがおそらく、以前優勢であった「地位」や「序列」また「年齢」による用法が時代の流れと共に特に戦後の近代化の一つである家督制の廃止と社会システムの変化によって消滅し¹³⁾、唯一残った「子供中心的」要素が現代では大きく働くことになったのではないかと推測される。

それを考慮すると、方言研究者達が言う通り、方言地域における「子供中心的用法」が共通語の影響で生じたということに関しては否定できそうである。つまり、方言地域であるゆえ単にその変化が遅かっただけではないかと考えられるのである。言い換えると、都会であるゆえ古いきまりが早く衰退し変化が早かったともいえよう。

一方、「地位・序列呼称」が存在した方言地域においては、以前「子供」は全く家内の呼称に関係がなかったという考え方も否定したい。

第一に、実際本稿で見た通り(表2:上杉 1991) これはあくまでも呼びかけ表現に限って言えることであるが、家督制が存在しそれによる地位呼称・序列呼称というのが盛んに使用されていたにもかかわらず、「子供中心的呼称表現」の使用が確かに存在していた点、第二に、近世時代の資料に、大人が子供をまねた呼称表現をしていたという記録が明確に残っている点、第三は第二と関連しているが、「地位・序列・年齢」による家族呼称の多くが「直接的用法」として用いる語彙と全く一致している点である。例えば、「トト」「カカ」「チヂ」「ババ」などの呼称がそれぞれ「戸主・父親・夫」「戸主の奥さん・母親・妻」「祖父・老男」「祖母・老女」のように多重的な意味役割を果たしているということである。それに関しては、大橋(1978)でも、多くの場合、地位呼称と呼ばれるそれらの語彙は絶対的な面と相対的な面の二面性¹⁴⁾を持つことが示されている。それを踏まえると、家族間の呼称には「子供」を含む他の諸要素が共に存在すると同時に混在しているともいえそうである。

では、なぜこのような現象が起こったのであろうか。

近世の言語風習や方言をまとめた字書類でも記録されているが、筆者は家族呼称というのが子供が使うものを大人が共に使うことになり、そこから始まった使用が結局は「地位・序列呼

称」としても通用するようになったのではないかと推察してみる。

すると、「子供中心的用法」は単に共通語の影響で生じた現象ではなく、確かに以前から日本に存在していた言語習慣であったものと言えるのである。

三 不変の「家中心的用法」

以上で、「子供中心的用法」が以前から存在していた日本の言語習慣であるということが明らかになったが、それと共に見逃してはいけない重要な事実がある。

現代・近代・近世の三つの時代の資料を通して見た結果、時代ごとにその決定要素が変わってきてはいるものの、各時代において一つの共通する特徴が見られた。

それは近世・近代・現代のいずれの時代においても、家族同士で呼びかける時はさまざまな要素が左右するが、どの要素が働こうと一人の成員がすべての成員によってあるいは複数の成員によって同じ呼称で呼びかけられるといった「一律的呼び合い方」が成されているということである。例えば、現代の場合を例に挙げると、最下位の家族成員にとって「お父さん・パパ」である場合、妻からも親からも「お父さん・パパ」と呼ばれることであって、それは近代における「序列」による呼称でも、近世における「年齢」による呼称でも見られる現象であった。私はその「一律的呼び合い方」と「家中心的」な考え方が深くかかわっていると見る。

鈴木(1998: 203-204)は、日本の家族呼称と「家」概念の重要性に関して次のように指摘している。

私は日本語に見られる他者中心語でかつ子供中心的な親族用語の使い方に対して *Oikonymy*(ギリシャ語 *oikos* = 家)という新しい用語を提案する。日本語の場合は家「家族」という概念が決定的な役割を果たしているからである。日本人が家の中で「お母さん」という時、それは「私のお母さん」でも「お前のお母さん」でもない「うちのお母さん」の意味なのであって、この「うちの」は明言される必要がない。

まさにその通りで、図1でも示したが、いずれの時代においても、また呼称を決める要素が「年齢・地位・序列・子供」のどれであろうとそれによって使用するようになった呼称は、「家」を単位として対象化され、もはや元の要素の性質から独立した代名詞相応のものとなり、「家の誰々」といったものとして働くものと考えられる。つまり、ある一人の家族成員に対する時、**家族成員それぞれは一人の個人ではなく、「家」においてどういう人物(position: 地位・役割)¹⁵⁾であるかが重要な要素**として働いていると見える。「一律的呼び合い方」が成されるのはそのためではなからうか。

このように、「家」を中心とした言語習慣が存在することを裏付けてくれているのが、まさに「一律的呼び合い方」であってそれがどの時代においても見られるということは、このような言語習慣が日本において根強く作用していたことを物語ってくれているのではなからうか。

以上を踏まえると、家族間の呼称表現(呼びかけ語)というのは、各時代に見られた決定要素だけでなく、「家中心的」な言語習慣が共に働いて成り立つものと判断してよからう。

「地位・序列・年齢・子供」+「家中心的用法」 家内の呼称

おわりに

家族間の呼称表現の使用において、「子供中心的用法」が古くから存在した言語習慣であるかどうかという問題を中心に考察を進め、それを通じて日本の家族用語の使用原理が何であるかを究明してきた。

結論として言えることは以下の通りである。

現代に見られる「子供」を原点とした傾向は、程度の違いこそあれ、少なくとも近世まで存在していた日本古来の言語習慣である。

以前は「子供」以外にも「地位・序列・年齢」の多要素が家族間の呼称を決める決定要素として働いていたが、それは時代の流れと共に簡素化されて現代のようになった。

しかし、家族間の呼称はいつの時代においても、どの要素が働こうと、その決定要素は単独ではなく、「家中心的(一律的呼び合い方)」な言語習慣と共に働いてきたのである。

そういうことを考慮すると、はじめにで紹介した親族用語の使用原理が「子供」であるか「地位・序列」であるかといった二つの見解の是非は、論争を起す必要がないことが判明した。つまり、どちらが先かどうか、あるいはどちらが正しいとかの問題ではなく、常に両方が複雑にからまりあって、共存していたということである。

最後に、今回の研究で重要なことがわかったが、それは、日本の家族同士で行っている呼称表現というのは常に、何らかの要素が働いてきた「間接的用法」による呼称表現が好まれて使用されているということである。そもそも家族間の呼称を決める決定要素が「子供」であるか「地位・序列」であるかといった論争自体がそれを証明してくれているのである。

家族同士で、その血縁関係通りの呼称を用いるとしたらそのような問題は起こらなかったのではなからうか。このような特徴こそ日本の特色的な言語習慣であると考えられる。

<注>

- 1) 鈴木(1973)・渡辺(1978)・李(1994)によると、家族同士では上位の者に対しては「親族呼称」を下位の者に対しては「名前呼称」を用いるとある。また、李(2000)・林(2001)・金(2001)では、それは日韓両国の共通の特徴であるということを示している。
- 2) 韓国には親が子供に対して「お兄さん」と呼んだり「パパ」と呼ぶようなことはないが、韓国国立国語研究院(『우리말의 예절(상): わが国の言葉の礼節』1996)の報告によると、最近では韓国でも都会

- を中心に妻が夫に対し「아빠(パパ)」と呼ぶ人が増えているとある。当報告書では、それは終戦後の過渡的時期にずっと曖昧であった夫婦間の呼称が日本の影響を受けてできた新しい風潮であると指摘している。P.79.
- 3) 渡辺(1978)は、日本語には個人親族語を年少の子供の立場からも使用することができると明記している。ところが、方言の中には個人親族語ではなく家・家族内地位親族語を名称・呼称に使用することも共に触れている。P.33.
 - 4) Embree(1939)は、一般の家庭生活では子供との関係によって呼び名がつけられるとしている。P.79.
 - 5) Cornell(1956)も同じ考えで子供によるものであるといい、日本の家族呼称は「誰々(子供の名前)の～」というふうな「テクノニミ」とは違っていることから「変形テクノニミ(modified teknonymy)」とした。P.162.
 - 6) Kitaoji(1971)は、東京の近くの谷保村(現在の国立町)を対象に調査したものであるが、夫に対して「otosan」妻に対して「okasan」と呼ぶことに関して、「it is not the kinship terminology, but the positional terminology that provides a conscious model of the Japanese family.」と説明している。P.1042.
 - 7) 馬瀬(1978)は、共通語では、結婚して子供が生まれると家庭内で自分の父を「オジーサン」、母を「オバーサン」と呼び方を変えるが、そのような子供中心の用法は比較的新しいものであって、以前は「家督制度」によって呼称が決まったと説明している。P.162.
 - 8) 上杉(1999)は、イエ(家督制による地位)を中心とするかつての用法は、戦後標準語が普及する過程で自己「子供」を中心とする用法に急激かつ不可逆的に変化して行ったと述べている。P.86.
 - 9) 馬瀬(1978)は、「地位」中心のな家族用語の使用が、琉球・九州・四国・山陽などの西の地方を除き、東日本を中心に顕著であったと説明している。P.167.
 - 10) 「一律的呼び合い方」とは、一人の成員がすべての家族成員から一つの呼称で呼ばれる方式を言う。金(2001)を参照されたい。
 - 11) 鈴木(1973)は、このような使用を親が子供と心理的に同調し子供の立場に自分(呼び手)の立場を同一化することによるものであるといい、「共感的同一化」と呼んでいる。P.168.
 - 12) 現代の日本語では一般的に、兄弟の間では年齢を基準に上の者は下の者に対して名前呼称を、下の者は上の者に対して親族呼称を用いるのが普通である。
 - 13) ここでは「消滅()」という言い方をしているが、厳密に言うと、それらの要素は完全な「無」の状態ではなくある程度の傾向として保持され、今でも家族呼称に影響を与えているのではないかと見られる。
 - 14) 大橋(1978)で、「ツアーツア・カカ」などの多くの親族語は、同一語が家督相続の資格を表す「絶対的な面」と子供に対する親という「相対的な面」の両方の見地からのもので二重的性格をになっており、それは新潟県の特徴であると述べている。P.102.
 - 15) どういう()であるかを決めるのは、「年齢・地位・序列・子供」といった決定要素であろう。

<引用文献>

- 李 翊燮(1994) 『사회언어학: 社会言語学』民音社(韓国)。
- 李 敬姫(2000)「親族呼称の日・韓対照研究」『日本文学紀要』11、昭和女子大学大学院、pp.13-22.
- 林 炫情(2001)「日本語と韓国語における呼称の対照研究序論」『国際協力研究誌』7-1、広島大学大学院 国際協力研究科、pp.107-121.
- 上杉富之(1991)「「イエ中心」から「自己中心」へ: 新潟県横根方言の親族語彙の特徴とその通時的变化」『民俗学研究』56-1、日本民俗学会、pp.67-91.
- 大橋勝男(1978)「新潟県の親族語彙」『日本方言の語彙 親族名称・その他』三省堂、pp.97-124.
- 金 世朗(2001)「日韓方言社会における家族間の呼称表現の諸相」『ことばとくらし』13、新潟県言葉の会、pp.1-10.
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書。

家族間の呼称表現における通時的研究（金）

鈴木孝夫（1998）『鈴木孝夫言語文化学ノート』大修館書店。

朝鮮日報・国立国語研究院（1996）『우리말의 예절(상) : わが国の言葉の礼節』朝鮮日報社(韓国)。

野口幸雄（1971）「西酒屋方言の親族呼称と対称代名詞」『ことばとくらし』創刊号、新潟ことばの会、pp.2-9.

馬瀬良雄（1978）「長野県の親族語彙」『日本方言の語彙 親族名称・その他』三省堂、pp.143-172.

渡辺友左（1978）「親族語彙の全国概観」『日本方言の語彙 親族名称・その他』三省堂、pp.27-42.

Cornell, J.B and Smith, R.J. (1956), "Matsunagi: the life and social organization of Japanese mountain community", *Two Japanese Villages*. Ann Arbor: University of Michigan Press, pp.113-232.

Embree, J.R. (1939), *Suye Mura: A Japanese Village*. Chicago: University of Chicago Press.

Kitaoji, H. (1971), "The Structure of the Japanese Family", *American Anthropologist*, 73:pp.1036-1057.

主指導教員（大橋勝男教授） 副指導教員（大石 強教授・舩城俊太郎教授）